

## 多文化間アドバイジング・カウンセリングの継続と変化 ～コロナ禍の国際学生支援～

国際教育交流センターアドバイジング部門

田中 京子・高木 ひとみ・酒井 崇・和田 尚子

### 1. はじめに

2020年度は年度を通して、新型コロナウイルス感染の世界的拡大により、地域社会・国際社会とも多大な負担を抱えることになった。国際教育交流における変化も大きく、外国人留学生在が渡日・再来日できなかったり、日本から海外への留学ができなかったり、または国際移動ができたとしても、知人もいない環境の中で15日間外出せず健康観察をするなど、困難を強いられる一年であった。

アドバイジング部門では、コロナ禍に関わらず心身の不調を訴えたり事故や事件に合ったりした学生たちの日々の相談に対応しながら、コロナ禍によって、状況の改善や解決がより困難になるケースを多く経験した。またこれまで対面を基本に企画運営されてきた共修活動にも、様々な工夫が必要となった。

学生たちとの協働作業、共修活動、また部門内でのコミュニケーションが可能になるよう、オンライン環境を整備しながら、模索し、試行し、創り出していく一年となった。2019年度から兼務する学生支援センターでは、留学生を取り巻く環境やその課題、相談の傾向などについて引き続き情報共有ができるように努めた。

### 2. 教育活動

#### (1) オリエンテーション：情報提供、信頼関係・交流・多文化理解の促進

留学生の渡日前から修了にいたるまでの参加型、交流型、日本語・英語併用オリエンテーションを、主にオンラインで行った。

#### 【到着後オリエンテーション】

- 全学新入留学生オリエンテーション

2020年2月頃からの新型コロナウイルス感染拡大に

より、春学期・秋学期ともオリエンテーションはオンラインのオンデマンド形式で行われた。アドバイジング部門では文化適応についてのナレーション付きスライドおよび、部門の関係資料を作成して掲載した。

- 宿舎オリエンテーション

外国から日本への入国は不可能、または難しい時期が多く、新学期の入居者は少数であったため、例年のような全体でのオリエンテーションは行われなかった。日本国内から移動して入居する留学生や、学期途中に入居する留学生には、RA（レジデント・アシスタント）がオンラインによるオリエンテーション資料を作成して新入居者に案内した。アドバイジング部門教員はそれらの資料について助言等を行った。

- NUPACE（Nagoya University Program for Academic Exchange）対象オリエンテーション

春学期・秋学期ともに新規渡日が難しく、NUPACE生の受け入れは中止となった。

#### 【交流型オリエンテーション（ワークショップ）】

世界の言語や文化を学ぶワークショップを地域のボランティア講師および名古屋大学学生グループの協力のもと行う予定であったが、緊急事態宣言による授業や課外活動の制限、学外者の来学制限等により、臨機応変な対応が必要となった。（本年報「事業報告」中の「留学生支援事業」を参照）。日本文化紹介のセッションとして、教養科目（オンライン）「留学生と日本」の中での「折り紙」講座、NUSTEP（名古屋大学短期日本語プログラム）オンラインプログラムの中での「着物」講座、全学学生を対象にオンラインと一部会場見学による形式で「狂言」ワークショップを開催した。近年継続されてきたケンブリッジ大学からの短期交換留学プログラムは中止となった。

#### 【引越しオリエンテーション】

教育交流部門によって、オンラインで開催された。

アドバイジング部門では、「引越しハンドブック」の各宿舎への配布を担当した。

## (2) 国際教育交流プログラム

### 【スモールワールド・コーヒーアワー】

スモールワールド・コーヒーアワー(以下、コーヒーアワー)は、学部や学年を越え、学生が出会い繋がることのできる場を提供することを目的として、2005年後期に発足した。運営や企画に主体的に携わる学生メンバーたちによって支えられ、キャンパスにおいて気軽に交流できる場づくりを継続して行っている。

2020年度は、前期2回、後期2回、計4回のオンライン・コーヒーアワーを開催した。新型コロナウイルスの影響によって、学生のキャンパスへの登校が制限され、留学生の日本への渡日が難しい状況下で、対面でのイベントが開催できず、今年度は全てウェブミーティングツール (Zoom) を用いたオンラインイベントとなった。広報活動やイベント内容の企画など手探りの状態であったが、画面を共有できることや、海外からも参加できるという利点があった。キャンパスにおける学生の交流が難しい状況において、オンラインによって、来日できない留学生や、登校できない新一年生も参加することができた。さらに、今年度は、国際交流学生グループ (ヘルプデスク、名古屋大学生協留学生委員会 COFSA) と連携して、開催することが可能となった。

開催月	テーマ	参加人数
2020年6月	みんなで話そう (お話しすごろく)	約20名
2020年7月	オンライン写真展	約20名
2020年11月	ゲームイベント (ジェスチャーゲーム・ワードウルフ)	約20名
2020年12月	オンライン写真展2	約15名
		計 約75名

オンライン・コーヒーアワーの課題としては、イベントでの交流や対話が活発に行われるよう、学生メンバーたちがファシリテーターとなり、小グループでのコミュニケーションを促していたが、継続的な学生間のネットワークが構築されにくいという課題が残った。イベント終了後に、オンラインミーティングツール (Zoom) を閉じてしまうと、参加者間の会話は終わってしまい、次に繋がる関係性が構築されるまでに

は至らなかった。対面での活動を実施していた際には、コーヒーアワーのイベントに参加した学生たちが、何回かリピート参加した後に、学生メンバーと関係を築きながら、次第に学生メンバーに立候補していくような過程があったが、今年度は、そのようなケースはなかなか見られず、コーヒーアワーの学生グループとしても、今後運営に携わりたい学生メンバー募集に苦勞した。

2021年度は、大学の基準に基づき、感染症予防対策も行いながら、学生メンバーのミーティングから対面も交えて行えるよう検討していく。不特定多数の学生が募る、イベントを対面で行えるようになるには、まだ時間がかかりそうではあるが、対面とオンラインのメリット・デメリットを検討しつつ、新しいコーヒーアワーが実施できるよう企画していく予定である。

〈コーヒーアワー学生メンバーによる活動の振り返り・抜粋〉

- 大学内で国際交流ができる素敵な場です。自然な英語をたくさん浴び、そして話すことができる機会は本当に貴重だと思います。コロナウイルスの状況も見つつ、来年度はさらに活発に活動できることを願っています。
- コーヒーアワーでは、スタッフ、参加者として多様な人と関わることができることに魅力を感じています。現在海外との往来が難しくなっていますが、これからも工夫しながら国際交流の機会をつくり、参加できれば良いなと思います。
- 来年度も新型コロナに負けず、コーヒーアワーがよりよいものになっていけばいいなと思います。

### 【プレゼンテーション・アワー ～世界が広がる20秒～】

2020年6月、7月、12月に、グローバルプレゼンテーション大会「プレゼンテーションアワー～世界が広がる20秒～」をオンラインにて開催した。本プログラムは、2014年度から継続開催しており、学生のプレゼンテーション能力を高めること、アカデミックな交流の場を創出して、分野や国籍を超えた学生間のネットワークを構築することを目的としている。毎回、自ら発信したい学生たちが多く、登壇者が生き生きと発表している姿から、学内におけるオープンでアカデミックな交流の場の重要性が伺える。

今年度は、プレゼンテーションアワーの学生メン

バーと名古屋大学留学生会（NUFSA）と連携しながら、オンライン開催の企画運営を進めていった。イベントでは、アイスブレイクのクイズを入れて、参加者の方々が場に馴染み、質問やディスカッションなどしやすい場づくりを工夫した。司会（日本語、英語）、Zoomのチャット機能での質問受付なども、明るい雰囲気になるよう、声のトーンやテンポなど、学生メン

バーで工夫しながら実施した。オンライン開催によって、参加者が国内外から集まることができ、また卒業生などにもプレゼンターや参加者として声をかけることができ、新たなメリットを発見することができた。今後、対面における活動が戻ってきた後にも、オンライン同時配信の方法なども検討していく予定である。

開催月	テーマ	参加人数
第12回 Presentation Hour 2.0 (2020年6月)	「ワークライフバランスから見た日本とスウェーデン」 「人新世（アントロポロセン）のレビュー」	約25名
第13回 Presentation Hour 2.0 (2020年7月)	「スウェーデンで学んで幸せになるための秘訣」 「究極な幸せとは？」「アートを通じた国際交流」	約20名
第14回 Presentation Hour 2.0 (2020年12月)	「だから私は旅をする」「広島への旅」 「Naija Life」	約25名

本プログラムは、発表者が自分の研究、興味、活動等を発信し、聴衆者が発表を聞くことによって、視野や世界観を広げていくことを目的としているが、それと同時に、企画・運営を進める実行委員の学生メンバーがコーディネーションやリーダーシップ能力を高める場としての教育的な機能を持っており、関わる多くの学生たちが能力を発揮し、自己成長を促す契機を提供している。

〈プレゼンテーションアワー学生メンバーによる活動の振り返り・抜粋〉

- 非日常の空間と新たなアイデアに出会う面白さを存分に楽しんでいただけるよう、リラックスした雰囲気づくりを心がけています。
- アイデアシェアリングと国際交流の素敵な機会、できるだけたくさんの方に来て頂けるよう、広報に力を入れています。
- どなたでも参加しやすいようなフレンドリーな雰囲気を作るため、まずは運営メンバーも全力で楽しむことを忘れずに活動しています。

【多文化間ディスカッショングループ】

学生の適応援助、多文化理解の促進、そして多文化間における友人関係の構築を目的とした多文化間ディスカッショングループを毎学期、週に1回1コマ、オンライン開催した。春学期は2020年6月19日～7月17日、秋学期は2020年11月5日～12月24日に週1回実施

した。参加者は、基本的に申込みをした学生が定期的に毎週参加する形を用いている。春学期は毎回10名～15名、秋学期は毎回4～7名であった。オンラインツール Zoom のブレイクアウトルーム機能を用いて、小グループを作り、ディスカッションを展開した。大学院生ファシリテーター2名、アドバイジング部門スタッフ2名の協力を得て、オンライン上でテーマのブレインストーミングを行い、専門分野、学年、文化背景の異なる多様な学生がディスカッションを通して、互いの価値観、考えなど、共通点、相違点を学び、視野を広げることのできる機会となっていた。本グループは日常の学業や研究生活から離れて心を休め、リラックスできる場となっている様子も見られる。

毎回のグループには、学生（大学院生）ファシリテーターを配置し、企画・運営に携わることによって、当該学生のファシリテーションスキルやコーディネーションスキルを高めるプログラムとしても機能する仕組みを構築し、実施している。

〈参加学生の感想（抜粋）〉

- ジェンダーや宗教についての話し合いは少し難しかったですが、日本とは全く違う文化が知れて面白かったです。毎週とても楽しかったです。
- コロナ後の世界について、いろいろ話ができ面白かったです。
- We shared a lot of things each other and had a happy communication.

- 日本語と英語を切り替える練習ができたので良かったです。

#### 【グローバル・カフェ】

長期休みの間は、授業がないため人との繋がりを築くことができず、寂しさや孤独感を感じている学生が多いため、2020年3月、毎週月曜日のお昼休みに、気軽に話せるようなオンラインプログラムを実施した。多文化間ディスカッショングループとは形式を少し変えて、毎週固定されたメンバーではなく、誰でも参加できるようにオープングループの形式を取った。オンラインツール Zoom のブレイクアウトルーム機能を用いて、希望言語別に小グループを作り、ディスカッションを展開した。学生ファシリテーター3名、アドバイジング部門2名の協力を得て、会話しやすいテーマが描かれているトークングカードを用いて、ディスカッションを促した。参加者は、毎回4名～8名であった。長期休みの間に、日本語や英語を練習したい学生、気軽に他の人とのコミュニケーションを取る時間を作りたい学生などからは好評であった。来年度も長期休みの開催できるよう企画していく予定である。

#### 【Inspire Together：国際交流・共修活動に主体的に関わる学生のための オンライン・エンパワーメントプログラム】

新型コロナの影響により、キャンパスにおける国際交流・共修活動のオンライン化を進めたが、その手法については、学生たちも手探りであったため、オンラインによる新しい国際交流や共修活動について学び、互いにエンパワーメントできるよう、学生を対象としたオンライン研修を実施した。詳しくは事業報告を参照。

2020年9月14日「国際交流・異文化体験から何を学ぶのか」（講師：メーカー亜希子氏）国際交流・共修活動に関心のある学生を対象に、オンラインの国際交流セミナーを開催し、国際交流の意義や目的について検討し、オンラインを通して交流・共修活動を継続していくことの必要性を確認する機会を作った。

2020年12月5日「交流・共修活動に関わる学生のためのオンラインエンパワーメントプログラム」(名古屋大学・立命館大学・一橋大学共催) 3大学における学生主体の国際交流・共修活動の先進事例をパネルディスカッションの機会を通して学びあった。さらにコロ

ナ禍においても、学生たちが未来志向で将来計画が立てられるよう、ワークショップを立命館 APU 大学平井達也氏を講師に招いて開催した。

#### 【名古屋大学グローバルネットワーク(国際交流グループ) 活動報告】

名古屋大学グローバルネットワークとは、国際教育交流センターが顧問や支援する国際交流グループの連携を促すことを目的に2009年から存在している学内ネットワークである。現在、5グループ(スモールワールド・コーヒーアワー、プレゼンテーションアワー、ヘルプデスク、異文化交流サークル ACE、名古屋大学留学生会 NUFSA) が共同で活動報告書を作成している。

2020年度は、アドバイジング部門が中心となり、各グループに所属する学生と担当教職員と共同で年間活動の報告書を発行した。報告書は、アドバイジング部門のホームページを参照されたい。(http://acs.iee.nagoya-u.ac.jp/program/introduction.html) 活動報告の他に、合同でメンバー募集説明会なども実施しており、今年度はオンラインで開催した。

#### 【学生組織との連携】

• 異文化交流サークル ACE：異文化交流サークル ACE (Action group for Cross-cultural Exchange) は、様々なプログラムで名古屋大学に在学する留学生の生活のサポートや、留学生と一般学生の交流を促進するためのイベントの企画・運営を行う学生団体である。アドバイジング部門の教員が顧問を担当し、学生主体の活動状況を見守りながら、必要に応じて活動に対する助言、企画するイベントが多くに周知されるよう情報提供に協力している。学部2年生がサークルの代表や副代表を担い、中心になって活動を進めているが、大学院生などのメンバーも企画に携われるよう柔軟な運営体制を作り、より気軽に学生が交流できる機会の創出など、活動内容の更なる充実化を目指して尽力している。2020年度は、クリエイティブなアイデアを練り、様々なオンライン活動を展開した。

• 名古屋大学留学生会 (NUFSA)：NUFSA では、異文化交流サークル ACE と連携しながら、留学生のためのバザーやウェルカムパーティーを毎年2回実施しているが、2020年度は新型コロナの影響により開催が



叶わなかった。毎週 NUFSA メンバー間で、オンラインでのミーティングを重ね、オンラインによる新入留学生への歓迎ガイダンス、オンライン言語交換 (TANDEM)、メンタルヘルス予防質問会、ミュージック&ゲームナイト、プレゼンテーションアワーとの連携企画、Inspire Together での発表(他大学とのオンライン交流活動に関する研修会) など、積極的に企画を進め、国内外にいる在学中の留学生たちのサポート、そして交流機会の創出に尽力した。

- ・愛知留学生会後援会：1960年代に設立した任意団体で、60年以上にわたって愛知留学生会と連携して支援活動を行っており、2017年度からは、不測の病気や事故で経済的困難に陥った留学生のための緊急援助事業に限定して、後援会独自で活動している。緊急援助金の申請受付や、審査および支給や会計等を2012年度から田中が担当し、2020年度は合計9件の申請に対して援助金を支給した。

- ・名古屋大学中国留学生学友会：春学期はコロナ禍で歓迎会が中止されたが、秋学期はオンラインで歓迎会が行われた。また春学期には中国総領事館から中国留学生に向けて、当会を通してマスクなど衛生用品の配布があり、大学の感染予防基準に沿う形で配布いただいた。問題等を共有できるよう、アドバイジング部門から折に触れて連絡をとった。

- ・名古屋大学イスラム文化会 (ICANU)：感染予防のための学生の来学基準と大学施設の利用基準に沿って、毎週金曜日に行なう集団礼拝は一時期中止となった。文化交流イベントも行うことができなかった。問

題等共有できるよう、アドバイジング部門から折に触れて連絡をとった。

- ・名古屋大学アフリカ学生会 (2017年度設立)：全学同窓会からの助成金を得て2020年度に予定していた2回の文化・学術イベントは、延期となった。アドバイジング部門から折に触れて連絡をとった。

- ・名古屋大学韓国学生会：2020年度は特に連携活動がなかった。

- ・名古屋大学台湾留学生会：これまで連携をしていなかったが、2021年2月に国際教育交流センターに連絡があり、大学を通して会員募集の案内をしたいとのことだった。アドバイジング部門から当会に連絡をとったうえで、新入留学生用のオリエンテーション資料に情報を掲載した。

### (3) 学生個別教育 (相談) および診療

相談室での相談活動を「個別教育」と位置づけ、名古屋大学の留学生を主な対象としつつ、在学生や教職員、他大学へ進学した学生、地域構成員などの相談にも可能な限り対応した。また、保健管理室において、精神科医による投薬を伴う精神科診療も行った。相談対応は原則予約制としたが、予約のない場合でも可能な範囲で適宜相談に対応した。

#### 【相談件数】

2020年度の相談総件数は、図1の通りである。参考までに2018、2019年度の件数も示している。直接の面談による相談に加え、電話やメールによる相談も、対



図1 年度別相談総件数

応におよそ30分以上かかったものは件数に含めている。2018年度（2083件）から2019年度（1739件）では、相談対応にあたる教員と専門職員が5名から4名に減少したことによって、相談件数の減少がみられていたが、2020年度（1576件）は、さらなる件数の減少がみられた。この減少は、コロナ禍によって来日できないなどの理由のために在籍する留学生数が減少したことにより起因すると考えられる。相談に訪れた合計人数は413人（日本人学生や教職員など含む）で、留学生人数は264人であった。2020年11月1日時点では、名古屋大学には1965人の留学生が在籍しており、この人数を母数と仮定すると、在籍留学生のおよそ13.4%、すなわち7.5人に1人が当部門へ相談に訪れていることとなる。

2019年度および2020年度の相談内容別の件数を図2

に示す。一度の相談における内容が複数にまたがっている場合も少なくないが、その場合は主たる相談内容を選択している。2020年度は「心身不調・メンタル」868件、「国際交流・学生活動」273件、「生活・異文化適応」150件の順に件数が多い。この傾向は2019年度と同様である。「心身不調・メンタル」は全相談のおよそ55%と、半数以上を占めている。2019年度と比較して、「奨学金・授業料」と「生活・異文化適応」の増加がみられた。「奨学金・授業料」については、大学側が授業料免除のポリシーを変更したことによって、これまで授業料を免除されていた一部の留学生が免除されなくなったことが原因と考えられる。「生活・異文化適応」については、コロナ禍によって生活様式が一変したことによる相談が寄せられた。

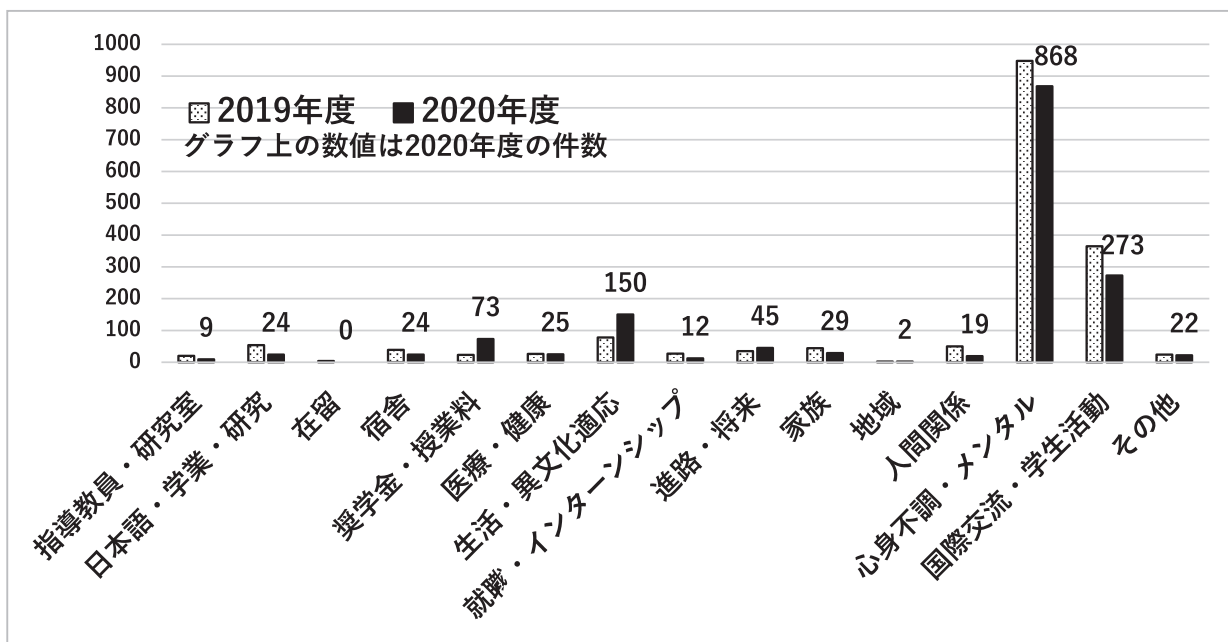


図2 相談内容別件数

2019年度および2020年度の学年・所属別の相談件数を図3-1に示す。例年、博士課程においては前期・後期ともに年次が上がるにつれて相談件数が増加する傾向がみられるが、2020年度においては、博士前期課程では同様の傾向がみられたが、博士後期課程ではD2が最も多く、D3は最も少なかった。また2020年度はコロナ禍によって渡日が困難な学生がみられたことを反映して、研究生の相談件数は少なかった。

図3-2では所属区分別在籍留学生一人当たりの相談件数を示している。所属別に在籍している留学生数（2020年11月1日時点）で2020年度の相談件数を割るこ

とで算出しており、学部学生：博士前期課程：博士後期課程=0.71：0.40：0.51となっている（図3-2）。学部学生の利用が多く、大学院生の利用が少ない傾向は、2019年度と同様である。

図4-1には、2019年度および2020年度の部局別の相談件数を示す。2019年度に比べて、2020年度は環境学研究科において、著しい相談件数の増加がみられた。また2019年度に著しく増加した経済学部・経済学研究科は引き続き高い水準で推移している。

図4-2に、部局別の在籍留学生一人当たりの相談件数を示す。各部局の相談件数を、該年度の11月1日

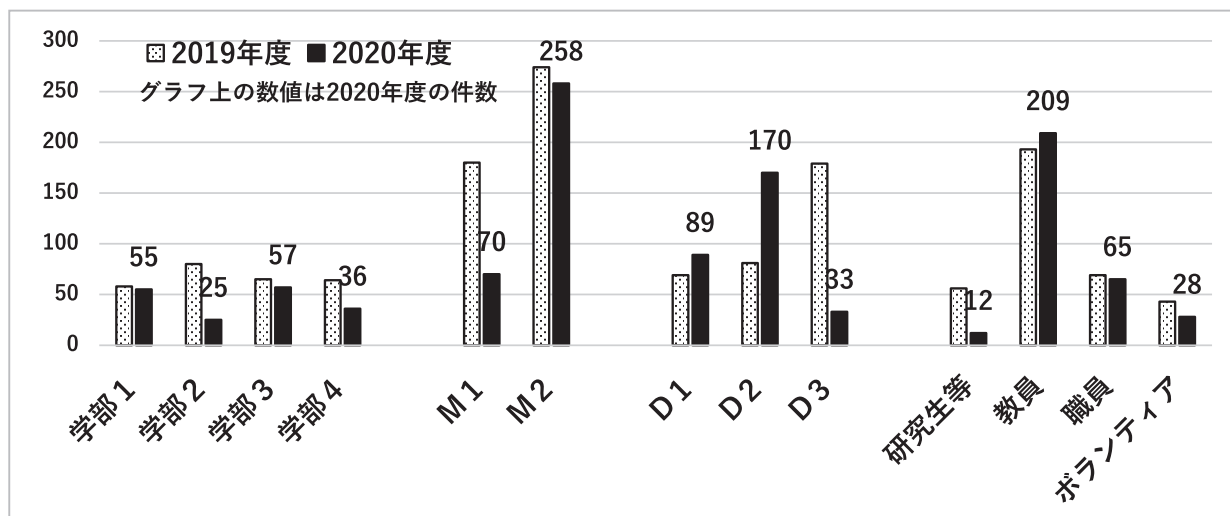


図3-1 学年・所属別相談件数

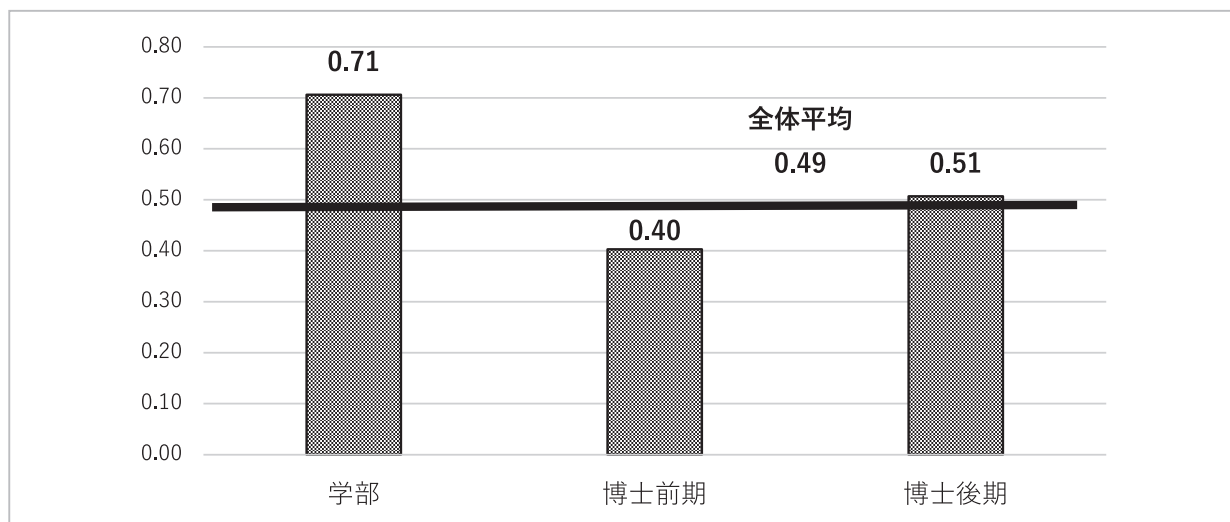


図3-2 所属区分別 在籍留学生一人当たり相談件数

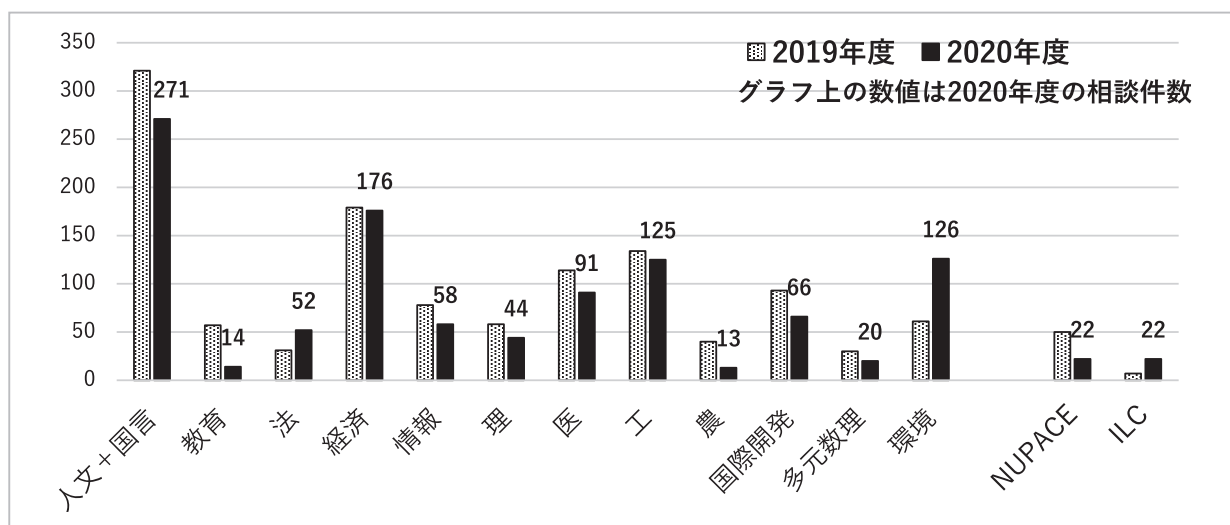


図4-1 部局別相談件数

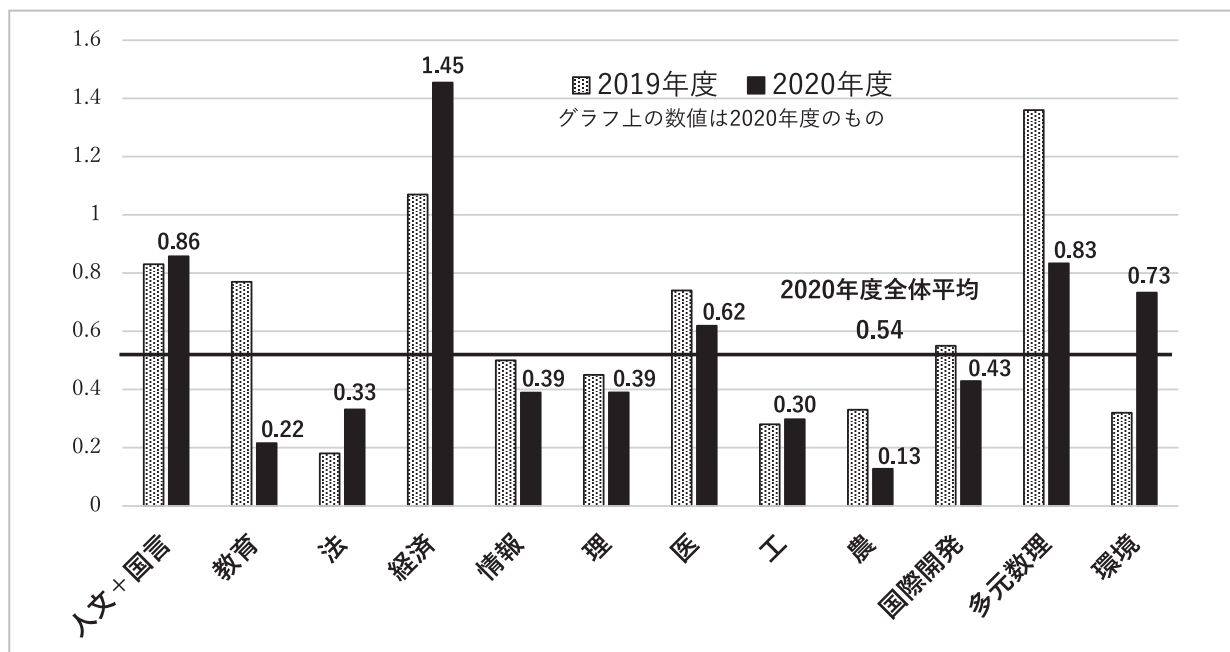


図4-2 部局別 在籍留学生一人当たり相談件数

時点での各部局在籍留学生数で割ったものである。多元数理研究科においては、2019年度に比べて2020年度は減少したが、全体平均よりは多い水準に位置している。環境学研究科においては、実相談件数の増加を反映して、在籍一人当たり相談件数においても増加がみられている。経済学研究科においては、2019年度に引き続いて2020年度においても全体平均より著しく高い水準にあり、学部・研究科特有の何らかの要因があるのかもしれない。

#### 【相談内容】

様々な相談の詳細やその背景については、相談者のプライバシー保護の観点から、報告することができない例が多いが、今年度の特徴として以下を報告し、今後の活動に活かしていきたい。なお、COVID-19の影響については項を改めて概要することとした。

#### ■指導教員・研究室

研究室での人間関係について、疑問や悩みが寄せられた。所属部局の国際化推進教員や学内外関連機関と適宜協力しながら、疑問の払拭や問題の解決にあたった。ハラスメントに該当すると考えられるケースもあった。また、留学生の指導教員等から学生対応について相談を受けることもあった。

学生へは、疑問に感じるものがあたら問題化しな

いうちに相談できる場所があることを、オリエンテーションや日々の活動の中で周知し、教員たちは、教員が自ずと持つ強い立場を理解し、学生に対する言動に自覚的になる必要性を共有している。

#### ■日本語・学業・研究

指導の受け方についての相談、教員との面会約束の取り方、論文指導の受け方等、出身国などで慣れて来た方法がそのまま通用しないこともあり、一緒に考えた。

オンライン授業が学生の礼拝の日時と重なることについての学生からの相談に対してどのような配慮ができるか、教員から相談があった。

#### ■在留

在留については留学生の所属部局において相談に対応する環境ができているため、本部門への相談はなくなった。

#### ■宿舍

今年度は、コロナ感染症の影響により、渡日留学生の入国が大幅に遅れるだけでなく、宿舍で2週間の自主隔離期間を過ごす学生も多くいたため、関係部署や宿舍で留学生支援をするRAと相談・協力しながら対応した。



### ■奨学金・授業料

コロナ禍でアルバイトが激減したこと、そして授業料免除申請の大学の方針に変化があったことも影響してか、例年よりも経済的困窮の相談が多かった。アルバイトや経済援助に関する情報提供を行った。今後、学内雇用をさらに増やし、また特に博士後期課程を3年間で終えられない学生たちへの支援をどう考えるか、検討が必要である。

### ■医療・健康

持病のため薬剤を継続する必要がある、日本国内での処方を希望する留学生において、状況を確認し、学外医療機関宛の診療情報提供書を作成した。

交通事故の被害にあった留学生の保険金や後遺症の問題について、昨年度から継続して保険会社との連絡や交渉に関わった。学外相談所等にも問い合わせながら慎重に進めたが、コロナ禍では学生の来学が難しく、一緒に詳細に書類を見ることができなかつたりで、電話やメールによるやりとりでは明確に伝わり難く、進捗は遅い。

### ■生活・異文化適応

複数のアカデミック・パワーハラスメントの事案があり、解決をめざして対応した。

### ■進路

研究の方向性を変えるほうがよいか、継続して研究生活を続けるべきか、休学や退学をしたほうがよいか、など進路に関する相談があった。就職の可能性についてはキャリア支援室と連携して対応した。

### ■家族

家族と一緒に日本に滞在している留学生が一定数おり、配偶者や子供の日本での生活適応についての相談があった。その一方で、母国にいる家族とのトラブルや健康問題等について不安を抱えて相談に来るケースも多く認められた。

### ■地域

地域交流はこれまで対面交流が中心であったため、2020年度は多くの交流事業が中止となった。教育機関・公的機関からの依頼も、本学の課外活動基準に沿って判断し、部門として協力できないケースもあっ

た。(4-(1)参照)。

### ■心身不調・メンタル

精神的不調により、入院治療を要する留学生において、部局の国際化推進教員と連携し、医療機関への連絡や調整を行った。また近隣の精神科医療機関は日本語でのみ診察対応をしているため、投薬による治療を要する英語話者の留学生のほとんどは学内保健管理室で診察・処方を行っている。

2020年度は、急速に精神状態が悪化し、精神科病院での入院治療を必要とする例が複数あった。

### ■国際交流学生グループ

名古屋大学留学生会(NUFSA)、名古屋大学中国留学生学友会、名古屋大学イスラム文化会(ICANU)、異文化交流サークル(ACE)、の相談に対応しながら連携した。会が主催する行事についての相談、教室や運動施設利用にあたっての申請や連絡、コミュニケーションについてなどである。その他、名古屋大学で活躍している様々な国際交流活動グループからの相談に応じた。学生グループの活動を通して名古屋大学の国際化に貢献した学生たちを、国際教育交流センター長顕彰に推薦した。なお、名古屋大学韓国留学生会とアフリカ学生会とは、この一年は連携活動はなかった。新たに、名古屋大学台湾留学生会から連絡があり、情報の案内に協力し、今後の連携について検討を始めた。

### ■交流活動

2020年度は交流活動には大きな制約ができたため、年度初頭は中止を余儀なくされた活動も多いが、その後オンラインによる交流についての相談が寄せられるようになった。部門としてドイツ語の会の開催支援および合気道教室の後援を行ってきたが、今年度は活動休止となった。合気道教室については今後学外で独自に開催することになったため、後援は本年度にて終了した。

### ■障害学生修学支援

自閉症スペクトラム症や注意欠陥・多動性障害などの発達障害があり、留学する学生が増加してきている。医療面では、必要な治療が継続できるよう適宜学内外の医療機関を紹介するとともに、修学面では、アビリティ支援センターと連携しながら、必要な合理的

配慮の提供などを検討した。

#### ■その他

2020年度も引き続き、「留学生のための確定申告セミナー」を名古屋税理士会の協力の元、実施した。詳細は、事業報告「外国人留学生・教職員のための確定申告オンラインセミナー及び個別相談会」を参照。

#### (4) 授業

春学期に、G30教養科目、全学教養科目として「Exploration of Japan: From the Outside Looking Inside (留学生と日本)」をオンラインにて開講した(高木)。秋学期の全学教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」は国際機構教員チーム(浮葉, 高木, 和田)により、オンライン開講した。

また、総合保健体育科学センターと共同で、後期にG30教養科目「Health and Sports」(酒井)を担当し、不眠への対応などの精神衛生教育を行い、授業を通じて精神的不調の予防につとめた。さらに、2019年度より博士課程推進機構が開催するProfessional Literacyの1コマ(Tuning up yourself)を担当し、博士課程学生へもメンタルヘルスの基礎知識の教授につとめた。受講者からの個別相談希望もあり、当部門との顔の見える関係性構築にも役立っている。

### 3. 大学国際化への貢献

#### (1) 民間留学生寮入居推薦者選考

留学生のために寮を提供している会社や団体が複数あり、入居希望者の書類選考を教育交流部門の教員や学生交流課の担当者とともにに行った。宿舎提供の趣旨や提供者の希望と申請者の条件が合致するよう、また、提供者には本学の学生の状況を理解いただけるよう、学生交流課を通してコミュニケーションをとりながら、選考にあたっている。2020年度は、指導教員による推薦書提出の必要性や方法についての検討を始めた。

#### (2) 国際交流会館レジデント・アシスタントや関係部署との連携

名古屋大学では、毎学期約600名の新規渡日留学生が国際交流会館に滞在している(インターナショナル・レジデンス 東山/山手/妙見/大幸)。今年度

は、COVID-19の影響により、例年通りの研修や宿舎での行事を行うことができない異例の一年となった。その一方で、関係者全体で情報共有ができるシステムを導入するなどして、コミュニケーション強化を図った。宿舎でのコロナ感染症予防対策については、関係部署と協力して対応した。時期によっては共有スペースを閉鎖したり、机や椅子の数を減らしたりと、宿舎で共同生活を送るからこそ得られる交流の機会を制限しなければいけない時期が長く続いたが、RAたちの協力を得て、オンライン・オリエンテーションを作成したり、オンライン交流会を実施したりと、新しい試みにも取り組んだ一年であった。

さらに、2020年11月以降は、新規留学生の入居が始まり、宿舎で2週間の自主隔離期間を過ごす学生が多数あった。留学生を受け入れるにあたり、自主隔離期間中も食事・日用品の手配ができるよう、関係部署や生協と協議を重ねるとともに、予防対策についても検討し、受け入れ準備を進めた。ただ、予測が立たない状況の中での支援であったため、円滑な対応が難しい局面もあった。不足品の手配や緊急対応等、RAたちが、その都度必要とされている支援に主体的に取り組む、隔離中の学生支援に大きな役割を果たした。

今年度は、コロナ禍で未曾有の事態でのRA活動となり、普段通りの取り組みはできなかったものの、新しい形での支援を模索した一年であった。RAたちが機転を利かせてさまざまな支援に取り組んくれたことで、隔離期間中の留学生を支援することができたが、RAたちの負担が増幅してしまう側面や、RA自身の安全確保等、多くの課題が認められた。今年度の活動や対応を見直し、今後より円滑な対応に取り組めるよう課題の洗い出しを改めて行う必要がある。関係者間での迅速な情報共有や、共有認識の確認等もそれぞれ課題の一つであり、できることできないことの線引きについての検討も必要であろう。困難な状況でこそ、関係者間での連携を強化し、取り組み方を工夫し、実現可能、かつ継続可能な支援の仕方を検討することは重要である。

#### (3) 部活・サークル活動国際化

昨年度から引き続き、部活・サークル活動に関する調査を行った。今年度は、留学生や関係者への聞き取り調査等を行い、今後の部活・サークル活動国際化に向けた課題を洗い出した。(本調査に関しては、事業報

告「名古屋大学部活・サークル実態調査：国際化に向けて」を参照。）

#### 4. 地域社会と留学生の交流への貢献

##### (1) 国際理解教育への留学生募集の広報協力

地域組織等が主催する行事への留学生参加募集の後援・広報協力について、問い合わせは数件あったものの、コロナ禍で実施自体が困難であり、また、アドバイジング部門が参加を取りまとめた行事は無かった。

明和高等学校より依頼のあった「明和グローバルサイエンス交流会」へのコメンテーター募集は、広報前に中止となった。名古屋国際中学・高等学校より依頼のあった「カンボジアの食文化を知ろう」講座への講師募集については、本学の課外活動基準により広報ができなかった。トモノカイより依頼のあった、岐阜市で実施の半日イングリッシュキャンプへの講師募集については、広報したがその後中止となったと思われる。

地域住民にとっては国際教育の機会がほとんど持てない一年であり、留学生にとってもまた、地域貢献や地域における交流活動の機会が激減した一年となった。

##### (2) コロナ禍での地域一般家庭との交流

2020年度は、実際に家庭を訪問してのホームステイ・ホームビジット事業は実施できなかった。しかし、秋学期に初めて「文通プログラム」を試行的に実施し、アドバイジング部門に登録している地域国際交流団体の協力を得ることができた。また2021年2月にはこれも初めての「オンラインホームビジット」をNUSTEP（名古屋大学短期日本語プログラム）の休日オプション行事として行った。地域のHippo Family Clubに受け入れ協力を依頼して、学生と当クラブの会員家庭が交流した。文通もオンラインホームビジットもそれぞれ、留学生と地域の人々を繋ぐ価値ある活動となった。

さらに、アドバイジング部門に登録しているホストファミリーには「地球家族プログラム便り」を作成して送付し、今後も連携していけるようにした。（詳細については本年報、事業報告編の「地球家族プログラム」を参照）

##### (3) 地域連絡会・留学生のためのバザー

2020年度は、名古屋大学留学生会（NUFSA）、異文化交流サークルACE、YWCA、ともだち会、地域のボランティアの方々と30年以上継続して実施してきた、留学生のためのバザーは開催できなかった。大学の基準に基づき、今後の状況を判断しながら、対面でのバザー開催を検討していく予定である。国際教育交流センターにおけるセンター長顕彰の対象を広げることが可能となり、名古屋大学における留学生支援やバザーの運営等、長年支えてきてくださったボランティア団体「国際交流ともだち」と「YWCA」に、国際教育交流センターからセンター長顕彰が授与された。また毎年、物品提供や配達にご協力をいただいている近藤産興株式会社からは、新型コロナの影響を受けている学生たちへの食料支援に多大な協力をいただいた。

##### (4) 警察との連携

千種警察署や愛知県警察本部とはこれまでと同様、地域の安全や留学生たちへの的確な情報提供のために連携し、特に新入留学生が、日本は安全であると過度に信じて犯罪にまきこまれることがないように、また学生集会などが他人によって思わぬ方向に利用されないよう、警察からアドバイスを受けた。2020年度は特に、インターネットを通しての情報が多い中で起きがちな犯罪や、自転車事故防止について、警察で作成した多言語による注意喚起ポスターの提供を受け、掲示等によって留学生たちに案内した。

#### 5. 新型コロナウイルスパンデミックによる留学生への影響と対応

新型コロナウイルスのパンデミックは、留学生のみならず、全学生の生活・修学様式に大きな変化をもたらした。ここでは、特に留学生に特有と考えられる影響と当部門で行った対応について記す。

2020年4月22日から30日にかけて、国際教育交流センターにて実施した留学生を対象とした「COVID-19に関わる留学生の実態調査」では、留学生のおよそ33%が日本もしくは名古屋における感染状況や行動制限の正確な情報がわからないとの結果が得られた。また少数ではあったものの、常備薬が手に入らない留学生も一定数いることがわかった。さらに、留学生においては日本人学生と比べて、新型コロナウイルスの影

響によって、アルバイト収入の減少、仕送り収入の減少、通信料などの新型コロナウイルス関連支出の増加により、経済面で困窮する学生が多いことも判明した。また、オンライン授業が授業形態の中心となったことで、自宅での学習に集中困難をきたす学生も多く、図書館が利用できないことで修学・研究に支障をきたしたとなった学生も多かった。

国境を跨ぐ移動が困難となったことは留学生にとって、大きな問題となった。日本を出国できないことの問題として、心身の不調をきたして母国で家族のサポートのもとでの休養が望ましいケースでも帰国できないこと、母国で親族に不幸があっても駆けつけられないこと、研究に必要な海外でのフィールドワークができなくなったこと、海外への進学や就職が制限されたことなどが挙げられる。日本に入国できないことの問題として、母国にいるままでオンライン授業を受けようとするとき差が大きい地域では睡眠リズムが崩れてしまうこと、日本に家族を呼び寄せなければいけない事態となっても家族が日本に入国できないことなどが挙げられた。特に、家族の渡日ができないことは、不調に陥った留学生対応において、教職員や周囲の友人学生たちの支援負担を著しく増大させた。

留学生のメンタルヘルスにおいては、新型コロナウイルスによって情勢が大きく変化したにもかかわらず、多くの留学生はなんとか変化に適応しているという印象をもった。一方で、一部の留学生は変化への適応に困難を示し、精神的不調を呈した。かつてより秩序志向が強く、自らに高い要求水準を課していた学生（例えば、良い成績・研究を維持しなければならない、名門大学院に進学しないといけないなどと考える学生）が変化に適応しきれない際に不調となることが複数みられた。これらの学生には、常に前進し続けるのではなく、時には立ち止まる経験も重要であることを保証する対応が肝要であると考えられる。

## 6. 研究・研修

### (1) 著書・論文・報告

- 田中京子「教員研修留学生にとっての日本留学の長期的成果と課題～ラテンアメリカ出身者への聞き取り調査から～」『留学生交流・指導研究』第23号、国立大学留学生指導研究協議会、2020
- 藤井基貴、太田知彩、高木ひとみ、星野晶成「日本

における国際教育交流分野の第三領域に関する研究動向」『静岡大学教育研究』第17号、静岡大学大学教育センター、2021年

### (2) 学会活動

- 国立大学法人留学生指導研究協議会（COISAN）編集委員（和田）
- 国立大学法人留学生指導研究協議会（COISAN）副代表幹事（田中）

### (3) 研究活動・FD/SD 活動

#### 〈発表・講師等〉

- 2020年9月3、4日 国際教育研究コンソーシアム夏季大会「内なる多様性に気づき慈しむ体験型ワークショップ」（平井・高木）
- 2020年9月8日 2020年度 国立大学法人留学生センター等 留学生指導担当研究協議会分科会ファシリテーター（田中）
- 2020年10月31日～11月1日 発達障害の精神病理ワークショップ「自閉症スペクトラムにおける言語の可能性／不可能性、あるいは主体の場について」（酒井）
- 2020年11月28日 BRIDGE Institute ワークショップ「異文化理解を深めるための理論と実践を改めて考える：海外渡航が困難な今だからこそ」（高木、他）
- 2021年2月8日 2020年度国立大学法人留学生指導研究協議会 兼 第54回大阪大学留学生教育・支援協議会「Covid-19禍の留学生受け入れの状況と今後：パートII」分科会ファシリテーター（田中）
- 2021年3月14日 JAFSA 多文化間メンタルヘルス研究会「COVID-19状況下における留学生のメンタルヘルス」（酒井）
- 2021年3月14日 JAFSA 多文化間メンタルヘルス研究会 ケース検討 ファシリテーター（和田）

#### 〈主催〉

- 2020年11月25日「吉本興業所属芸人に学ぶ お笑い比較文化論と漫才①」講師：フランボネ、ヘンリーイシイ、藤田ゆみ、コウ
- 2020年12月9日「吉本興業所属芸人に学ぶ お笑い比較文化論と漫才②」講師：フランボネ、ヘンリーイシイ、藤田ゆみ、コウ
- 2021年1月19日「授業のUD化」（学内FD）、講師：



横山りえこ

- 2021年3月4日「できるかできないかではなく、やるかやらないか」講師：三澤 拓

#### 〈共催〉

- 2020年8月26日「大学における業務とダイバーシティー」（高等教育研究センター第187回招聘セミナー），講師：メーカー重希子

#### 〈参加〉（主なもの）

- 2020年9月2日～9月4日 国際教育研究コンソーシアム夏季大会「新型コロナ禍と国際教育の将来像」オンライン参加（田中）
- 2020年9月8日 2019年度 国立大学法人留学生センター等 留学生指導担当研究協議会オンライン参加（田中，酒井，和田，高木）
- 2020年9月19日 留学生教育学会第25回年次大会オンライン参加（田中）
- 2020年10月16日～17日 日本精神病理学会第43回大会オンライン参加（酒井）
- 2021年2月8日 2020年度国立大学法人留学生指導研究協議会 兼：第54回大阪大学留学生教育・支援協議会オンライン参加（田中，酒井，高木）
- 2021年2月11日 国立大学法人留学生指導研究協議会（COISAN）第9回留学生交流・指導研究会オンライン参加（田中，酒井，和田）
- 2021年3月14日 JAFSA 多文化間メンタルヘルス研究会オンライン参加（田中，酒井，和田）
- 東山症例検討会（保健管理室，毎月開催）
- 東山グループスーパービジョン（ケース検討）（毎月第2月曜日）
- 海外文献抄読会参加（2020年11月）（酒井，和田）

#### （4）研究助成

- 日本学術振興会科学研究費補助金 国際共同研究強化(B)「日本メキシコ双方向の長期的留学成果～政府

文化外交50年の分析」2018年10月～2023年3月（研究代表者：田中）

- 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C)「ハラスメント問題に対応するソーシャルワーカー養成のための集学的研究」（研究代表者：山形大学 中澤未美子，研究分担者：和田）
- 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B)「大学の国際化を担う専門教職員の養成メカニズムに関する国際比較研究」2020年4月～2024年3月（研究代表者：高木）

## 7. 社会連携

### 国際交流関係財団等の委員

- 愛知留学生会後援会 常任理事，緊急援助金担当（田中）
- 愛知県国際交流協会 評議員（田中）
- 大幸財団 奨学金選考委員（田中）

## 8. おわりに

2020年は，特別な一年であった。感染拡大の状況や，日本政府・地方自治体・大学の方針を注視しながら，部門予算をやりくりし，ITに詳しいスタッフたちが中心となって可能な範囲の機器を揃え，部門の勤務環境を整えて，臨機応変に仕事をしていくことができた。これは，日常から，時代の変化に対応しながら真摯に活動に取り組み，各人が専門性を高めてきたからこそ可能になったことである。その成果が，非常時といえる状況に適切に対応する力になった。

今後の新型コロナ感染状況も予断を許さないが，日頃の活動の蓄積と新たな知見によって，部門の活動を深化させていきたい。国際学生たちの研究と生活を支え，彼らが目的を達成できるよう，尽力していく所存である。勿論，スタッフ自身の心身の健康保持・増進にも努める必要がある。